

## 聖書

聖書は、創造者なる神の「知恵、知識、真理の宝庫」

「直ぐな心で（ヨシエル）」、聖書に向かう者は多くの宝を見つけ、何よりも神に出会う

詩篇119：7、エペソ人6：5「真心から」、マタイ13：44-46

しかし、深く知ること「知識」をどれほど積んでも、信じ委ねる「信仰」には至らない

- ②ダイナミックな多角的、立体的構造：背後に神意 [偶然はない]  
全聖書の構成の焦点は、人類の救い主イエス・キリスト
- ③古代ヘブル（イスラエル）史を通して記された正確な人類史：  
過去（史実）を学び、現在を見分け、未来を見通す洞察力習得のテキスト
- ④聖書自体が成就を証しする真の神の預言：聖書が聖書を解釈  
神の約束の確かさ、成就の確かさ（ご自身の言葉に真実な神）
- ⑧ひな型、予型：預言的に前もって示される、未来のある出来事、本物の写し、影

## 使徒パウロの宣教

## その29

『ローマ人への手紙』3：9-4：25

## すべてが有罪

- ① 1：18-32 他の神々、偶像を拝む異教徒は有罪
- ② 2：1-16 道徳人も有罪
- ③ 2：17-29 ユダヤ人も有罪
- ④ 3：10-18 全人類が有罪

## 3章

：9「…どうなのでしょう。私たちは他の者にまざっているのでしょうか…」（下線付加）：

\* 順に、ユダヤ人、異邦人に言及

：10「それは、次のように書いてあるとおりです。『義人はいない。ひとりもない』：

\* 全人類が有罪

：11「悟りのある人はいない。神を求める人はいない」：

\* すべての者が意識的に神を無視

\* 主権者なる神が人を選ばれる！

→ルカ4：25-29

：12-14「すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった…」：

\* 人々は真理に背を向け、上向きに進化せず、下向きに退化

## 人の行為

☆心 → のど → 舌（話す） → くちびる → 足（行為）

☆人は心（魂）を持ち、身体で生きている霊

：17「また、彼らは平和の道を知らない」：

\* 神から離れて、真の平和はない

：18「『彼らの目の前には、神に対する恐れがない。』」：

\* 心が罪に支配された者には神に対する恐れがない

→詩篇36：1

：19「…すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです」：

\* 律法を完全に守ることのできる者は一人としていないので、

全世界は神の裁きの下に置かれている

→ヤコブ2：10-11

## 聖書

- : 21 「…今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によって証しされ…」 (下線付加) :  
 \* 律法以外に、の意  
 \* 解決策は「福音」、一唯一の療法—  
 \* 宗教は、神の御前に自分を正当化しようとする「人の試み」にすぎない
- : 23 「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません」 :  
 \* 異教徒、道德人、ユダヤ (宗教) 人、すべてが堕落し、神の栄光にあずかることができない
- : 24 「…キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」 :  
 \* 重要な言葉  
 1. 「贖い」 身代金が支払われたことによる完全な解放  
 2. 「価なしに」 恩寵によって  
 3. 「義と認められる」 法的に罪がないと宣言される
- : 25 「…その血による、また信仰による、なだめの供え物…」 (下線付加) :  
 \* ‘ἵλαστήριον (ヒラストリオン) ’, 「なだめのふた」で  
 ヘブル語の‘תְּפִלָּה (カファレタ) ’ 「贖いのふた」に由来

## 神の本質

1. 主権
2. 全知
3. 全能
4. 遍在
5. 愛
6. 不変
7. 義

## 神の最大の問題

☆義なる神は罪を放任することはできず、罪ある人を正しいとみなすことはできない

- : 26 「…神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためです」 :  
 \* キリストこそ、罪人が「義」と認められるための解決策
- : 28 「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による…」 :  
 \* アブラハム、まだ異邦人の地にいたとき、信仰によって義と認められた  
 → 創世記15:6  
 \* 身体に契約のしるし「割礼」が刻まれる前、義と認められた

## 4章

- : 1 「それでは、肉による私たちの父祖アブラハムの場合は、どうでしょうか」 (下線付加) :  
 \* ユダヤ人の父祖アブラハムに言及  
 \* 「アブラハムが肉にしたがって学んだのは何だったのでしょうか」の意

## 陰った道德心

☆アブラハムが良心ある異邦人から教訓を学んだ出来事

→ 創世記12:10-20、20章

- : 2 「もしアブラハムが行いによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます…」 :  
 \* 信仰か、働き (行い) か?  
 \* 律法主義 = 働き + 信仰  
 \* パウロ、まず、アブラハムが働きによって義とみなされたと仮定し、アブラハムは確かにそのことを誇りにできたであろうと、伝統的なユダヤ人たちの考えに同意  
 \* しかし続けて、アブラハムが人々の前で誇ることもできたとしても、神の御前ではそうではなかった、と説明

## 聖書

- : 3 「**聖書は…『それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた』とあります**」：  
\* 割礼を受けていなかったアブラハムの信仰の歩み、  
創世記12章の召名から、創世記17章の割礼の出来事までの五章に記述

### エルサレムでの教会会議 —使徒の働き15章—

☆重大な議論

1. 異邦人はどのようにして救われるのか
2. イスラエルはどうなるのだろうか

### 二つのジレンマ

- ①キリスト者は救われるために、律法を守らなければならないのだろうか
- ②イスラエルの場合はどうなのか

→使徒の働き15：15-17

- ☆アモス書9：11-12からの引用がその答え
- ☆イスラエルにはまだ神のご計画がある！

- : 4 「**働く者の場合に、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます**」：

- \* 働く者が相応の報酬を得るのは当然、人はそれを得るために努める
- \* 無条件の贈り物「恩寵」とは、人の「働き」とは全く無縁の神の恵み

- : 5 「**何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じる…**」（下線付加）：

- \* 「働かないままにいる者」の意

### ヤコブの主張 —ヤコブ2：14-22—

☆真の信仰は働きを生み出す

☆しかし、人の働きが信仰を生み出すことはない、自慢を生み出すだけ

- : 7-8 「『**不法を赦され、罪をおおわれた人たち…主が罪を認めない人は幸いである。』**」：

- \*パウロ、詩篇32：1-2を引用

「**幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は**」

### 用語

☆そむきの罪：神の基準の境界を越えること、神に対する反逆

☆罪：的を外すこと、神の基準に達さないこと

☆咎：神の基準からの逸脱、曲解、罪人の心の内の性質に起こることを描写

☆欺き：悪知恵

☆赦す：重荷を除く、「贖罪の雄やぎ」によって描写される

→レビ記16：20-22ほか

☆おおう：負債を帳消しにする

☆認める：数える

### 割礼（儀式）は信仰後の証印

☆アブラハムは割礼を受ける前すでに神に対する信仰があったので「信仰の父」と呼ばれる

☆アブラハムの割礼は、信仰によって義とされてから十三年以上も後に施された

- : 12 「**…私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父…**」：

- \*アブラハムは無割礼の異邦人の父
- \*アブラハムは、忠実な者たち、信仰のステップに従う者たちの父

### 儀式、式典

☆救いの手段ではない

☆洗礼も同様、証しにすぎない！

## 聖書

: 13-14 「…世界の相続人となるという約束が、アブラハムに…その子孫に与えられ…」 :

\* 神のアブラハムへの約束は律法授与より五世紀も前

→創世記12:1-3

\* すべての時代の信徒は「アブラハムの種/子孫」

### 神の救いのご計画 —神ご自身がすべてを達成された—

① 神の大きな犠牲、計り知れない寛容

② キリストの大きな犠牲

③ 神の御旨を成就されたキリストに与えられた誉れ

④ 全被造物と神ご自身を和解させるため

キリストが十字架上で血を通して達成された平和

→ 罪人はみな、自分の手段ではなく神の手段でのみ、御国に入る

: 15 「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません」 :

\* 直訳では、人の神への不従順の結果「律法は怒りを生み出し続ける」

\* 律法はただ裁くだけで、祝福することはできない

: 16 「…と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです」 :

\* パウロ、創世記17:5から引用、聖書に基づく権威で結論づけ

\* 信仰に基づく約束は、

アブラハムのすべての子孫、一神への信仰に生きるすべての者たち— に保障される

: 17 「…神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののお呼びになる…」 :

\* ギリシャ語の直訳では、

「神は死んだ者を生かし、存在しないものを存在するもののように呼ばれる」

### イスラエルと教会

☆ 信仰で応答したアブラハムに対する神の契約には、アブラハムの身体的子孫に対する

約束とは別に霊的な次元があり、信じる異邦人への約束も保障された

☆ 教会の中で、両者に区別はない

☆ にもかかわらず、イスラエルと教会は分かたれている

☆ 異なった源、異なった行く先

☆ 神はアブラハムへの約束、

—アブラハムの血縁のイスラエルの民が新生後、約束の地を相続— を破棄しておられない

☆ この約束は、メシヤの千年支配の時代に成就する

: 18 「彼は望みのないときに望みを抱いて信じました。それは、『あなたの子孫はこのようになる』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした」 :

\* アブラハム、望みのない状態にもかかわらず神を信じた

: 21 「神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました」 :

\* アブラハム、神の御性格、本質に依存した

: 23-25 「…主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められ…」 :

\* 神が罪人を義と認めてくださる「義認」は、すべての人たちに対してではない

\* それは、主、イエス・キリストを死人から甦らせた方を信じる者に対して保障される

### まとめ

1. 1-8節

義認は賜物、働きによっては獲得されない

2. 9-12節

割礼の儀式は、義認とは何の関係もない

3. 13-17節

義認は律法に基づかない

4. 18-25節

アブラハムは、信仰のゆえに義と認められた